



Gairaigo Oda Rānes

When I first started learning Japanese it all seemed like a maze. The sentence structure, the grammar, the three alphabets, how would I ever crack the code?

Well, I still haven't cracked the code yet, but, I have realised that even in a language that is distant from European languages, there is a sense of familiarity. Excluding Chinese origin words, there are words that originated outside Japan; gairaigo. You might think that all the words written in Katakana come from English, but that's not always the case.

When I started teaching, one word blew my mind: Randoseru - a backpack used at primary schools in Japan. It brought back memories from when I was going to start school and went to buy my first Ransel. In Norway, we use the same word when we talk about school bags. It's a Dutch origin word and would not be understood in native English speaking countries. The same goes for words like rentogen (X-ray in German, and also used in Norway), pan (bread in French/Spanish) and buranko (swings in Portuguese). Also, I had no idea that ikura came from Russian, I thought it was a Japanese word. Well, one fun thing about learning Japanese is that you'll also learn words from other languages at the same time! Why don't you try to find out where katakana words come from, too?

【ちょっと豆知識】宮地晶子

イクラと言えば、ロシア語では魚卵全般のことで、赤いイクラがいわゆるイクラ、黒いイクラがキャビアのこと。イクラと言えばオクラ？こちらは英語でも okra。アフリカ原産です。別名 Lady's Finger (女性の指) と言います。finger と言えばイギリスに fish fingers という魚のフライがあります。インドで注文したら、細くてほんとの指みたいな形で出てきて、魚だけにギョッとすることがあります。

外来語 ウダ・マイ・ローネス

最初、日本語を習い始めたときは、全く迷路に入ったみたいでした。文の構造、文法、3種類の文字(漢字、ひらがな、アルファベット)。どうやったらこの暗号を解読できるのやら、と。まあ、いまだ解読には到ってませんが、それでもヨーロッパ系言語からはほど遠い日本語にも、ある種の親しみを持てることに気がつきました。それが外来語です。中国由来の言葉以外にも、他の国に起源を持つ言葉がありました。カタカナは全部、元は英語だと思うかもしれませんが、そうとも限らないのですね。

ここで教え始めたとき、とっってもわくわくする言葉に出会いました。それは「ランドセル」。日本の小学

校で使うあのリュックサックです。自分も初めて学校に通うとき、ランドセルを買いにいった記憶が蘇りました。ノルウェーでも学校カバンをランドセルと呼びます。でもこれは起源がオランダ語なので、英語を母国語とする人々には理解されないでしょう。同じことが「レントゲン」(ドイツ語・ノルウェーでも使う)や「パン」(フランス語・スペイン語)、「ブランコ」(ポルトガル語)などでも言えます。あと「イクラ」がロシア語だったとは知らなくて、日本語だと思っていました。日本語を学ぶことの楽しさは、同時に他の国の言葉も学べるということです。皆さんもカタカナがどこからきた言葉なのか突き止めてみませんか。

(訳:宮地晶子)

英語教育指導員 宮地晶子の

エイゴノマナビカタ

第172回

目指すものは同じなのに

里帰りしたときのこと。某英会話スクールの看板が目に入り、通っていた頃の記憶がどっと蘇りました。そのスクールは1回90分のレッスンが週2回。毎回暗記の課題があって、行くのがイヤでたまらなかつた。でも(今では想像もできないでしょうが)内気過ぎて、電話が怖くて休めませんでした。分厚いテキストが5冊あって、会話、代入ドリル、スピーチ、絵を見て描写するもの、短い文章を読んで即時応答するものなど、よくできていて、90分全く気

を抜けませんでした。1年の終わりにはどのテキストもボロボロ。30人いたメンバーは1年の終わりには、いつも3~4人でした。我ながらよく頑張ったものだ、と思います。年払いの学費も結構な額で、改めて両親に感謝の念を覚えます。暗記は大変でも、慣れるとコツがつかめ、かなりな量も短い時間でこなせるようになりました。その他、系統的にトレーニングすることで、瞬発力がつきました。翻って、中学校の授業はどうか。1回50分の授業が週4~5回。トータルな時間は英会話スクールより長い。本当なら、もっと結果が出てもいいはず。でも、今のままでは、同等の効果が出る気がしない。なぜなのでしょう。もちろん、英語が話せるようになりたくて集まった生徒ばかりではない、というのも理由の1つ。でも、それ以上に、文科省が言っていることが的外れな気がしてならない。「主体的、対話的深い学び」だの「気づき」だの。語学習得ってもっとシンプルなことなんじゃないかなあ、と考えています。